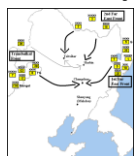


第二百三十五話 防衛作戦における避難の困難性（ソ連の満州侵攻）

国土防衛戦における住民の避難措置は難しい問題である。関東軍は、国民を見捨てたとの悪評が高いが、果たしてどうだったのか？

1 中立条約違反のソ連軍の対日参戦

ソ連は、ヤルタ密約に基づき、日本時間 1945（S20）年 8 月 9 日午前 0 時、極東ソ連軍総司令官率いる 3 個正面軍（ザバイカル、第一極東、第二極東）80 個師団約 157 万人が、西、北、東の 3 方向から満州に侵攻した。これに先立ち、1945 年 4 月有効期間中である日ソ中立条約の延長を認めない旨を通告し、独ソ戦終了に伴い欧州の大兵力を転用したのである。



2 関東軍の情勢判断と防衛構想

関東軍は、満州防衛のため、ソ連との国境に 14 の永久要塞を建設していた。要塞群の密集する東部・北部で阻止しつつ、西方面では段階的な後退行動により敵戦力の減殺を図る。最終的には通化、臨江一帯の総複郭を最終確保地域とするというものであった。関東軍は、兵員約 70 万人とされるが、圧倒的なソ連の戦車と火砲に比すれば、無に等しい。関東軍は精強師団を太平王正面に転用され、将兵の質もかつての面影はなかった。大本営は、8 月か遅くとも 9 月上旬にはソ連の攻勢が危険視されるとしていた。然し、関東軍作戦課の情勢認識はかなり楽観的であった。前線部隊は、情勢の切迫を感じていたが、それが関東軍として共有されることはなかった。

3 関東軍の居留民保護に関する構想と実態

内地への移動には船舶の準備が不可能であり、朝鮮半島は戦場となる可能性もあり、やむを得ず、関東軍抵抗地区の後方に集結させることを計画した。軍は「対ソ静謐」を、満州開拓総局は、非常措置を連絡するも開拓団は深刻にとらえず、且つ総局は後退しないと決定、中央省庁からの指示はなかった。

ソ連の侵攻に、大本営からの命令は翌 10 日にあった。関東軍司令部で具体的な居留民待避の検討が為された。10 日 18 時、民、官、軍の順序で新京から列車を出すことを決定した。官・民の避難準備が整わず、決定された順序を破棄し、集まった順に避難させることとなった。第 1 列車はようやく 11 日 0140 発車できた。故障や事故も起き、現場は混乱をきたし、避難措置は非常に困難であった。結果的に最初に避難したのは軍関係者と満鉄関係者であった。国境付近の居留民は置き去りにされた。18 本の列車で、日本人市民 14 万人中 3.8 万人が脱出した。因みにその内訳は、軍人関係家族 2 万強、満鉄関係約 1.7 万、民間 240 人、大使館関係家族 750 人である。恣意的な避難周知だったとの非難がある。辺境の居留民は、第一線部隊が保護していたが、救出の余力なく、殆どの居留民は後退出来なかった。

4 関東軍の降伏と満州居留民の苦難

奇襲を受けた関東軍は、各地で圧倒的な敵に対し厳しい戦いを強いられていた。ポツダム宣言受諾に伴う即時戦闘行動停止命令にも拘らず、自衛戦闘を継続せざるを得ず、自衛戦闘を含む全戦闘停止が履行されたのは、8 月末であった。総司令部の移転時期に関する非難もある由。ソ連に抑留された将兵は約 60 万人に上る。逃避行を続ける在留邦人もソ連軍に虐殺され、匪賊と化した中国農民、暴徒に変じた中国人により、数多の痛ましい事件が起きた。（第百十一話参照）

5 軍は邦人を見捨てたのか？若干の観察

- (1) ソ連軍の侵攻時期の情勢判断の遅れが避難準備の遅れに
- (2) 関東軍の戦力低下が侵攻を易々と許し、避難邦人の被害を拡大（第百二十話参照）
- (3) 官民への周知時期と避難準備促進、作戦行動と避難との節調は。
- (4) 居留民は軍と行動を一にすることを希望する者も多し。

（了）